

# 中部大学人文学部の新入生における 学科選択理由の分析

小塩真司<sup>\*</sup>・願興寺礼子<sup>\*\*</sup>・桐山雅子<sup>\*\*\*</sup>

## 問題と目的

中部大学人文学部は1998年に日本語日本文化学科、英語英米文化学科、コミュニケーション学科の3学科でスタートした。その後、2002年に心理学科、2004年に歴史地理学科が設置され、現在では5つの学科で構成されている。

円滑な学部・学科運営にとって、入学してくる学生の動向を適切に把握することは不可欠である。しかしながら日常業務の中で、教職員がすべての学生を全体的かつ客観的に観察することも、観察の際に学生に対する先入観を排することも極めて困難である。そこで本研究では、人文学部新入生を理解するための基礎的なデータを呈示してみたい。

中部大学ではすべての新入生を対象として、4月から5月にかけて学科ごとに、恵那研修センターで1泊2日の研修が行われている。そしてその研修では、学生相談室アンケートが実施されている。この調査には大部分の1年生が参加しており、また毎年入学後1～2ヶ月とほぼ同時期に調査が行われていること、さらに長年にわたり実施されていることから、非常に貴重な資料となり得るものである。筆者ら（願興寺・桐山・小塩、2006；桐山・願興寺・小塩、2006；小塩・願興寺・桐山、2005, 2006, 印刷中）はこれまでに、学生相談室アンケートを様々な観点から分析することを試みてきた。たとえば小塩・願興寺・桐山（2005）は、学生相談室アンケートで得られた1988年度から2004年度までの17年間のデータから中部大学への志望理由・目標・学科選択理由を入学年度で比較し、本学新入生の近年の傾向として、明瞭で積極的な理由で本学を志望する者や、積極的な目的意識をもつ者、将来性や適性を考えて学科選択をする者が増加傾向にあることを明らかにした。また、小塩・願興寺・桐山（印刷中）は、2006年度新入生の進学目標、学部・学科選択理由、学業への取り組み方と満足度に注目し、学部間での比較を試みた。そして、人文学部への新入生の特徴として、教養を高め人間的に成長することや大学生活をエンジョイするという進学目標をもち、自分の適性を考えて学科を選択し、大学での勉学の動機づけがやや低く、単位取得の不安がやや

<sup>\*</sup>人文学部助教授-パーソナリティ心理学・発達心理学

<sup>\*\*</sup>文学部助教授-臨床心理学

<sup>\*\*\*</sup>学生相談室教授-相談心理学

高いこと、総合的な満足度は比較的高い傾向をもつことなどを明らかにした。

本研究では、学生相談室アンケートの項目の中から、学科選択理由を取り上げ、学科ごとに分析を試みる。そして、人文学部が開設された 1998 年度から 2006 年度までのデータを分析対象とし、それぞれの学科が開設されてから現在までの入学年度による変化に注目する。なお本研究は学科間の比較を主たる目的とするものではなく、あくまでも客観的に、入学年度による学科選択理由の変化を学科ごとに記述するものである。

## 方 法

### 調査の概要

人文学部が開設された 1998 年度から 2006 年度までの新入生を対象に行われた、学生相談室アンケートの一部のデータを分析の対象とした。学生相談室アンケートは新入生を対象とした 1 泊 2 日のオリエンテーション合宿において実施されている。このアンケートは 4 つのパートで構成されており、第 1 のパートは中部大学を選んだ理由や大学に進学するにあたっての目標、学科を選択した理由、第 2 のパートは学業への取り組み方や教員とのかかわり方、第 3 のパートは満足度や悩みの有無、悩みの内容、第 4 のパートは健康理解のための調査項目である。

### 設問

本研究では第 1 のパートのうち「学科を選択した理由」を分析対象とする。この設問は、「いまの学科を選んだのは」という質問に対して、「1. 自分の適性を考えて自分で」「2. 就職や将来性を考えて自分で」「3. 合格の可能性を考えて」「4. 親や家族に奨められて」「5. 学校の教師の意見で」「6. 友人の影響をうけて」「7. 希望の学科に入れなかったので」「8. その他」の 8 つの選択肢のうち、当てはまるものすべてを選択する形式で測定された。

### 回答者

回答者は以下の通りであった。英語英米文化学科は 1998 年度から 2006 年度までの新入生のうち 701 名、日本語日本文化学科は 1998 年度から 2006 年度までの新入生のうち 799 名、コミュニケーション学科は 1998 年度から 2006 年度までの新入生のうち 774 名、心理学科は 2002 年度から 2006 年度までの新入生のうち 422 名、歴史地理学科は 2004 年度から 2006 年度までの新入生のうち 228 名、合計 2924 名である。

## 結果と考察

中部大学全体における学科選択理由の年次変化(1988年度～2004年度)については、小塩・願興寺・桐山(2005)が示した通りである。本研究では、まず人文学部全体の1998年度から2006年度の学科選択理由を示し、その後で学科別に検討していきたい。

### 人文学部全体

1998年度から2006年度までの学科選択理由の各項目への選択者数と選択率をTable 1に、各年度の選択率をグラフに表したものをFigure 1に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、「8. その他」についてのみ有意であった( $\chi^2(8, N = 2924) = 15.54, p < .05$ )。調整済み残差を算出することにより残差分析を行ったところ、1999年度の選択率が低く、2002年度は高い傾向にあった。

人文学部全体として最も選択率が高い項目は「1. 自分の適性」であり、毎年50%以上の学生がこの項目を選択していた。またこの項目の選択率は2001年度より上昇傾向にあった

Table 1 人文学部全体における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       |       |       |       |       |       |       | 合計    |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 1998  | 1999  | 2000  | 2001  | 2002  | 2003  | 2004  | 2005  | 2006  |       |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 162   | 171   | 158   | 128   | 178   | 218   | 247   | 267   | 246   | 1775  |
|                     | %    | 58.70 | 63.57 | 61.96 | 54.47 | 57.23 | 59.89 | 61.44 | 65.93 | 60.44 | 60.70 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 102   | 85    | 91    | 93    | 121   | 140   | 163   | 144   | 152   | 1091  |
|                     | %    | 36.96 | 31.60 | 35.69 | 39.57 | 38.91 | 38.46 | 40.55 | 35.56 | 37.35 | 37.31 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 25    | 41    | 21    | 25    | 38    | 40    | 38    | 37    | 36    | 301   |
|                     | %    | 9.06  | 15.24 | 8.24  | 10.64 | 12.22 | 10.99 | 9.45  | 9.14  | 8.85  | 10.29 |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 7     | 2     | 5     | 1     | 5     | 9     | 9     | 12    | 10    | 60    |
|                     | %    | 2.54  | 0.74  | 1.96  | 0.43  | 1.61  | 2.47  | 2.24  | 2.96  | 2.46  | 2.05  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 21    | 13    | 11    | 15    | 12    | 12    | 11    | 17    | 18    | 130   |
|                     | %    | 7.61  | 4.83  | 4.31  | 6.38  | 3.86  | 3.30  | 2.74  | 4.20  | 4.42  | 4.45  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 1     | 8     | 3     | 6     | 8     | 10    | 16    | 8     | 11    | 71    |
|                     | %    | 0.36  | 2.97  | 1.18  | 2.55  | 2.57  | 2.75  | 3.98  | 1.98  | 2.70  | 2.43  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 22    | 17    | 12    | 15    | 15    | 24    | 25    | 18    | 26    | 174   |
|                     | %    | 7.97  | 6.32  | 4.71  | 6.38  | 4.82  | 6.59  | 6.22  | 4.44  | 6.39  | 5.95  |
| 8. その他              | 選択者数 | 10    | 6     | 14    | 8     | 26    | 20    | 22    | 17    | 19    | 142   |
|                     | %    | 3.62  | 2.23  | 5.49  | 3.40  | 8.36  | 5.49  | 5.47  | 4.20  | 4.67  | 4.86  |
| 調査参加者               |      | 276   | 269   | 255   | 235   | 311   | 364   | 402   | 405   | 407   | 2924  |

が、2006 年度の新入生は 2005 年度に比べてやや低くなっている。

2 番目に選択率が高かった項目は「2. 就職や将来性」であり、近年では 30% 台後半の学生がこの項目を選択する傾向にある。3 番目に選択率が高かった項目は「3. 合格の可能性」であり、1999 年度の 15.24% が最も高く、その後は 10% 前後の学生がこの項目を選択する傾向にある。4 番目に選択率が高かった項目は「7. 希望の学科に入れなかった」であり、4% ～ 7% の学生がこの項目を選択していた。

「4. 親に奨められて」「5. 教師の意見」「6. 友人の影響」の 3 項目はいずれも、学科選択を行う際の他者の影響力を反映する項目であると考えられるが、いずれの項目の選択者数もあまり多いとはいえなかった。

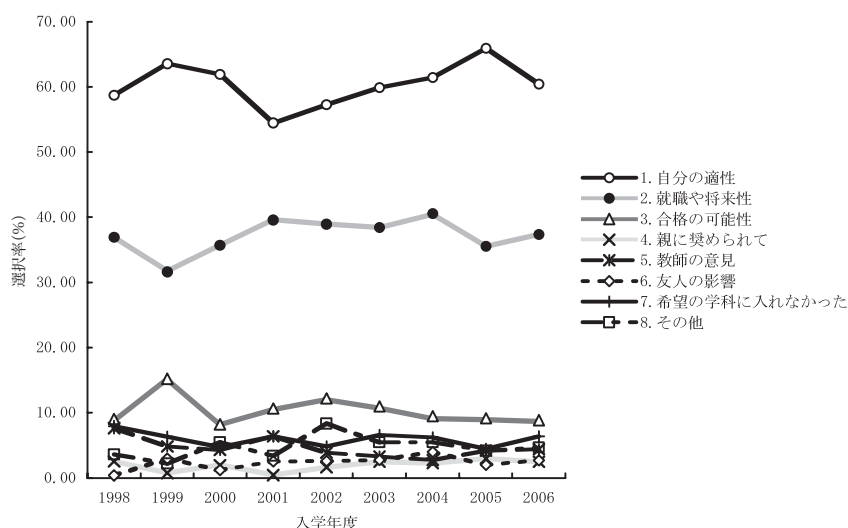


Figure 1 人文学部の学科選択理由各項目への選択率

## 英語英米文化学科

英語英米文化学科の入学年度別の学科選択理由を Table 2 および Figure 2 に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、「2. 就職や将来性」( $\chi^2(8, N = 701) = 15.56, p < .05$ ) の選択率の差が有意であった。残差分析を行ったところ、1998 年度と 2000 年度の選択率が低く、2004 年度の選択率が高い傾向にあった。

入学年度によって多少の違いはあるものの、英語英米文化学科の新入生における特徴は、「1. 自分の適性」と「2. 就職や将来性」への選択率がほぼ同程度という点にある。また選択率の差は有意ではないものの、2003 年度に 11.58% の学生が「3. 合格の可能性」を選択していたが、2004 年度以降は 2, 3 名のみになっている点も特筆すべき点である。英語英米

Table 2 英語英米文化学科における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       |       |       |       |       |       |       | 合計    |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 1998  | 1999  | 2000  | 2001  | 2002  | 2003  | 2004  | 2005  | 2006  |       |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 51    | 33    | 53    | 27    | 39    | 49    | 37    | 40    | 40    | 369   |
|                     | %    | 54.26 | 48.53 | 64.63 | 44.26 | 52.70 | 51.58 | 48.05 | 55.56 | 51.28 | 52.64 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 40    | 40    | 33    | 36    | 37    | 54    | 49    | 37    | 41    | 367   |
|                     | %    | 42.55 | 58.82 | 40.24 | 59.02 | 50.00 | 56.84 | 63.64 | 51.39 | 52.56 | 52.35 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 8     | 7     | 4     | 5     | 7     | 11    | 2     | 2     | 3     | 49    |
|                     | %    | 8.51  | 10.29 | 4.88  | 8.20  | 9.46  | 11.58 | 2.60  | 2.78  | 3.85  | 6.99  |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 0     | 0     | 1     | 1     | 1     | 2     | 4     | 2     | 3     | 14    |
|                     | %    | 0.00  | 0.00  | 1.22  | 1.64  | 1.35  | 2.11  | 5.19  | 2.78  | 3.85  | 2.00  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 5     | 3     | 5     | 5     | 3     | 4     | 0     | 1     | 1     | 27    |
|                     | %    | 5.32  | 4.41  | 6.10  | 8.20  | 4.05  | 4.21  | 0.00  | 1.39  | 1.28  | 3.85  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 0     | 2     | 0     | 1     | 2     | 3     | 5     | 1     | 1     | 15    |
|                     | %    | 0.00  | 2.94  | 0.00  | 1.64  | 2.70  | 3.16  | 6.49  | 1.39  | 1.28  | 2.14  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 6     | 4     | 5     | 2     | 2     | 5     | 3     | 1     | 3     | 31    |
|                     | %    | 6.38  | 5.88  | 6.10  | 3.28  | 2.70  | 5.26  | 3.90  | 1.39  | 3.85  | 4.42  |
| 8. その他              | 選択者数 | 6     | 2     | 4     | 2     | 5     | 3     | 5     | 4     | 3     | 34    |
|                     | %    | 6.38  | 2.94  | 4.88  | 3.28  | 6.76  | 3.16  | 6.49  | 5.56  | 3.85  | 4.85  |
| 調査参加者               |      | 94    | 68    | 82    | 61    | 74    | 95    | 77    | 72    | 78    | 701   |

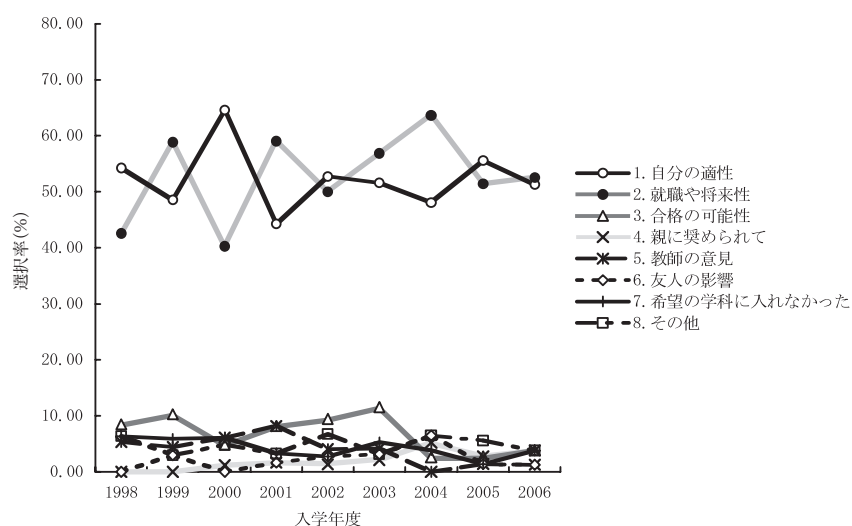


Figure 2 英語英米文化学科の学科選択理由各項目への選択率

文化学科では 2004 年度から全員長期海外研修プログラムをスタートさせていることから、単に合格の可能性を考えて学科選択を行うような消極的な学生が、2004 年度以降に減少したのではないかと考えられる。

## 日本語日本文化学科

日本語日本文化学科の入学年度別の学科選択理由を Table 3 および Figure 3 に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、「3. 合格の可能性」の選択率の差が有意であった ( $\chi^2(8, N = 799) = 18.38, p < .05$ )。残差分析を行ったところ、1999 年度と 2002 年度の選択率が高い傾向にあった。

日本語日本文化学科の新入生の多くは、自分の適性を重視して学科選択を行っているようである。この傾向は年度によってほとんど変化することなく、いずれの年度についても 70% 前後の学生がこの項目を選択していた。また「2. 就職や将来性」を選択する学生の割合も近年では変化があまりみられず、2002 年度以降は 25% 前後の学生がこの項目を選択していた。

比較的大きな変化を示した項目は「3. 合格の可能性」である。2002 年度の 20.88% 以降、

Table 3 日本語日本文化学科における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       |       |       |       |       |       |       | 合計    |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 1998  | 1999  | 2000  | 2001  | 2002  | 2003  | 2004  | 2005  | 2006  |       |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 59    | 71    | 60    | 62    | 59    | 66    | 64    | 57    | 52    | 550   |
|                     | %    | 63.44 | 70.30 | 71.43 | 70.45 | 64.84 | 69.47 | 70.33 | 68.67 | 71.23 | 68.84 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 22    | 11    | 17    | 18    | 23    | 23    | 24    | 20    | 19    | 177   |
|                     | %    | 23.66 | 10.89 | 20.24 | 20.45 | 25.27 | 24.21 | 26.37 | 24.10 | 26.03 | 22.15 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 10    | 24    | 8     | 13    | 19    | 15    | 10    | 9     | 5     | 113   |
|                     | %    | 10.75 | 23.76 | 9.52  | 14.77 | 20.88 | 15.79 | 10.99 | 10.84 | 6.85  | 14.14 |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 4     | 1     | 2     | 0     | 2     | 1     | 0     | 1     | 0     | 11    |
|                     | %    | 4.30  | 0.99  | 2.38  | 0.00  | 2.20  | 1.05  | 0.00  | 1.20  | 0.00  | 1.38  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 8     | 4     | 4     | 5     | 3     | 1     | 3     | 3     | 5     | 36    |
|                     | %    | 8.60  | 3.96  | 4.76  | 5.68  | 3.30  | 1.05  | 3.30  | 3.61  | 6.85  | 4.51  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 0     | 2     | 2     | 2     | 0     | 2     | 2     | 1     | 0     | 11    |
|                     | %    | 0.00  | 1.98  | 2.38  | 2.27  | 0.00  | 2.11  | 2.20  | 1.20  | 0.00  | 1.38  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 11    | 7     | 6     | 8     | 8     | 6     | 6     | 4     | 6     | 62    |
|                     | %    | 11.83 | 6.93  | 7.14  | 9.09  | 8.79  | 6.32  | 6.59  | 4.82  | 8.22  | 7.76  |
| 8. その他              | 選択者数 | 1     | 1     | 3     | 2     | 4     | 4     | 2     | 2     | 1     | 20    |
|                     | %    | 1.08  | 0.99  | 3.57  | 2.27  | 4.40  | 4.21  | 2.20  | 2.41  | 1.37  | 2.50  |
| 調査参加者               |      | 93    | 101   | 84    | 88    | 91    | 95    | 91    | 83    | 73    | 799   |

この項目の選択率が下がる傾向にあり、2006年度では6.85%の学生がこの項目を選択していた。これは、先に示した英語英米文化学科と同様の傾向である。この項目を選択する学生の減少は、主体的に学科選択を行う学生が増加傾向にあることを反映していると考えられるため、学科にとっては好ましい傾向であるといえるのではないだろうか。

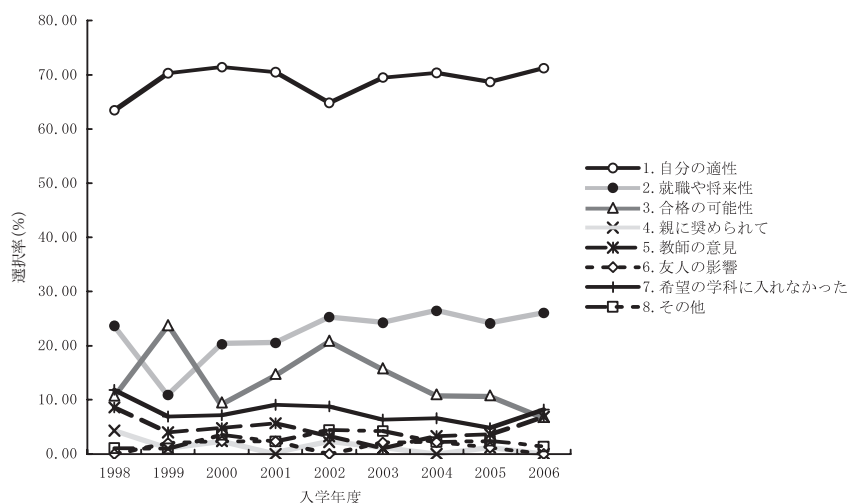


Figure 3 日本語日本文化学科の学科選択理由各項目への選択率

## コミュニケーション学科

コミュニケーション学科の入学年度別の学科選択理由を Table 4 および Figure 4 に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、「1. 自分の適性」の選択率の差が有意であった ( $\chi^2(8, N = 774) = 21.18, p < .01$ )。残差分析を行ったところ、1999年度の選択率が高く、2006年度は低い傾向にあった。また、「7. 希望の学科に入れなかった」の選択率の差も有意であり ( $\chi^2(8, N = 774) = 19.56, p < .05$ )、残差分析の結果から2000年度の選択率が低く、2003年度と2004年度の選択率が高い傾向にあることが示された。

Figure 4 をみると、1998年度から2006年度にかけて全体として「1. 自分の適性」の選択率が低下し、その一方で「2. 就職や将来性」の選択率が増加傾向にあるようである。また近年、「3. 合格の可能性」や「7. 希望の学科に入れなかった」の選択率もやや増加傾向にあるようである。ただし、2005年度から2006年度にかけてこれらの選択率は再び低下する傾向にあるため、この動向は今後も注意してみていく必要があるだろう。

Table 4 コミュニケーション学科における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 1998  | 1999  | 2000  | 2001  | 2002  | 2003  | 2004  | 2005  | 2006  | 合計    |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 52    | 67    | 45    | 39    | 38    | 39    | 40    | 45    | 32    | 397   |
|                     | %    | 58.43 | 67.00 | 50.56 | 45.35 | 50.00 | 45.88 | 43.48 | 57.69 | 40.51 | 51.29 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 40    | 34    | 41    | 39    | 39    | 40    | 47    | 39    | 45    | 364   |
|                     | %    | 44.94 | 34.00 | 46.07 | 45.35 | 51.32 | 47.06 | 51.09 | 50.00 | 56.96 | 47.03 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 7     | 10    | 9     | 7     | 9     | 12    | 16    | 15    | 13    | 98    |
|                     | %    | 7.87  | 10.00 | 10.11 | 8.14  | 11.84 | 14.12 | 17.39 | 19.23 | 16.46 | 12.66 |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 3     | 1     | 2     | 0     | 0     | 3     | 1     | 3     | 3     | 16    |
|                     | %    | 3.37  | 1.00  | 2.25  | 0.00  | 0.00  | 3.53  | 1.09  | 3.85  | 3.80  | 2.07  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 8     | 6     | 2     | 5     | 5     | 5     | 6     | 4     | 4     | 45    |
|                     | %    | 8.99  | 6.00  | 2.25  | 5.81  | 6.58  | 5.88  | 6.52  | 5.13  | 5.06  | 5.81  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 1     | 4     | 1     | 3     | 4     | 0     | 6     | 2     | 5     | 26    |
|                     | %    | 1.12  | 4.00  | 1.12  | 3.49  | 5.26  | 0.00  | 6.52  | 2.56  | 6.33  | 3.36  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 5     | 6     | 1     | 5     | 2     | 11    | 13    | 8     | 6     | 57    |
|                     | %    | 5.62  | 6.00  | 1.12  | 5.81  | 2.631 | 2.94  | 14.13 | 10.26 | 7.59  | 7.36  |
| 8. その他              | 選択者数 | 3     | 3     | 7     | 4     | 5     | 6     | 5     | 0     | 0     | 33    |
|                     | %    | 3.37  | 3.00  | 7.87  | 4.65  | 6.58  | 7.06  | 5.43  | 0.00  | 0.00  | 4.26  |
| 調査参加者               |      | 89    | 100   | 89    | 86    | 76    | 85    | 92    | 78    | 79    | 774   |

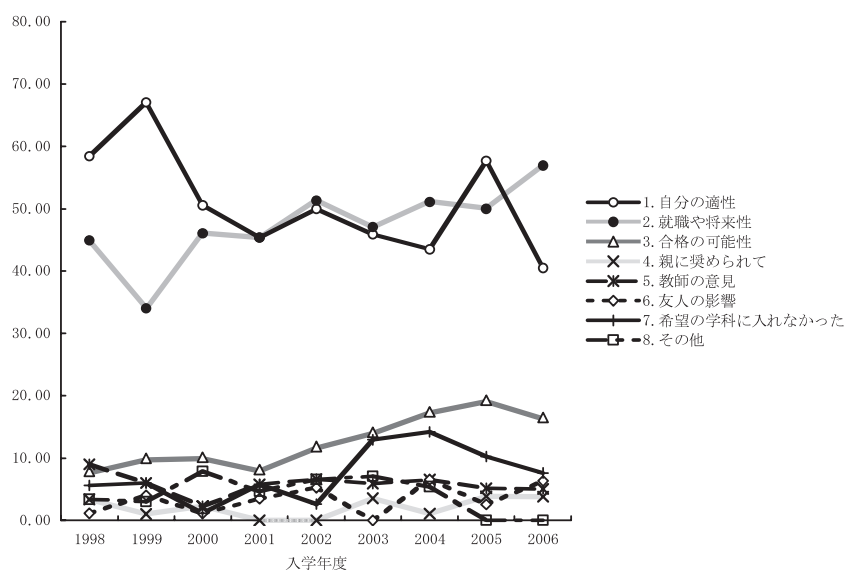


Figure 4 コミュニケーション学科の学科選択理由各項目への選択率

## 心理学科

心理学科の入学年度別の学科選択理由を Table 5 および Figure 5 に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、有意な選択率の差を示した項目はみられなかった。

心理学科新入生は自分の適性を考えて学科選択理由を行ったという者が最も多く、60%～70%の学生がこの項目を選択していた。「2. 就職や将来性」を選択した学生はすべての年度において3割程度に過ぎなかった。心理学科の特徴の1つに、「8. その他」の選択率の高さがある。しかしながら現在分析対象としているデータでは、どのような意図でこの項目を選択したのかが不明のままである。この点に関しては詳細に検討する必要があるだろう。

Table 5 心理学科における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       |       |       | 合計    |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 2002  | 2003  | 2004  | 2005  | 2006  |       |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 42    | 64    | 59    | 59    | 55    | 279   |
|                     | %    | 60.00 | 71.91 | 69.41 | 69.41 | 59.14 | 66.11 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 22    | 23    | 28    | 25    | 27    | 125   |
|                     | %    | 31.43 | 25.84 | 32.94 | 29.41 | 29.03 | 29.62 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 3     | 2     | 7     | 1     | 6     | 19    |
|                     | %    | 4.29  | 2.25  | 8.24  | 1.18  | 6.45  | 4.50  |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 2     | 3     | 2     | 3     | 2     | 12    |
|                     | %    | 2.86  | 3.37  | 2.35  | 3.53  | 2.15  | 2.84  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 1     | 2     | 1     | 3     | 2     | 9     |
|                     | %    | 1.43  | 2.25  | 1.18  | 3.53  | 2.15  | 2.13  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 2     | 5     | 2     | 3     | 5     | 17    |
|                     | %    | 2.86  | 5.62  | 2.35  | 3.53  | 5.38  | 4.03  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 3     | 2     | 2     | 2     | 2     | 11    |
|                     | %    | 4.29  | 2.25  | 2.35  | 2.35  | 2.15  | 2.61  |
| 8. その他              | 選択者数 | 1     | 2     | 7     | 9     | 9     | 15    |
|                     | %    | 17.14 | 7.87  | 10.59 | 10.59 | 16.13 | 12.32 |
| 調査参加者               |      | 70    | 89    | 85    | 85    | 93    | 422   |

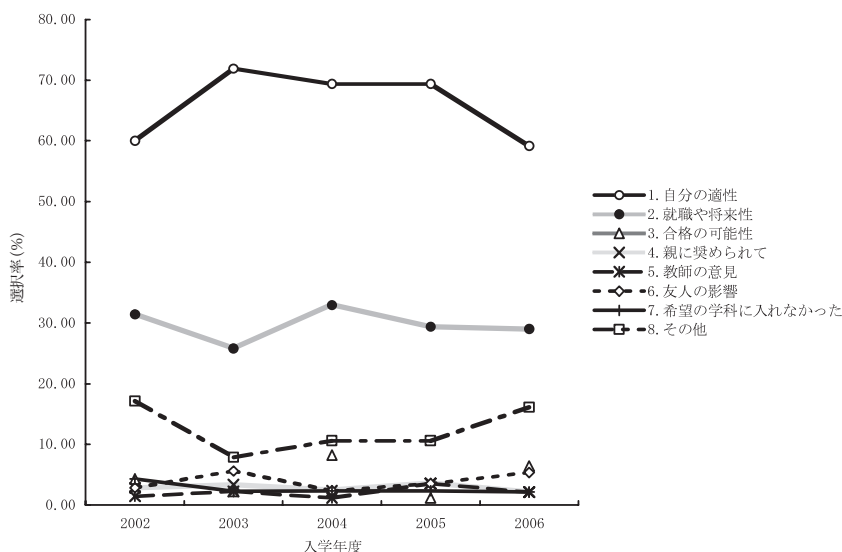


Figure 5 心理学科の学科選択理由各項目への選択率

## 歴史地理学科

歴史地理学科の入学年度別の学科選択理由を Table 6 および Figure 6 に示す。それぞれの項目について入学年度による選択率の差を検討したところ、「7. 希望の学科に入らなかった」の選択率の差が有意であった ( $\chi^2(2, N = 228) = 6.40, p < .05$ )。残差分析を行ったところ、2006 年度の選択率が高い傾向にあった。

歴史地理学科は開設してからまだ 3 回分のデータを得ているだけであり、明確な傾向を判断することはできない。学科開設以降、「7. 希望の学科に入らなかった」の選択率は上昇傾向にあるものの、この傾向が一過性のものであるのか否かは今後も検討を続けていく必要があるだろう。

## 最後に

本研究では、人文学部全体および学科ごとに、新入生の学科選択理由の入学年度による変化を検討した。人文学部全体では、最も回答率の高い項目は「自分の適性」であり、2 番目が「就職や将来性」であった。「自分の適性」については、いずれの学科についても選択率が最も高い傾向にあり、これは 1998 年度以降の大学全体の傾向と同様である（小塩他、2005）。その一方で、「就職や将来性」については、学科によって選択率の差が大きく異なる傾向にあった。日本語日本文化学科、心理学科、歴史地理学科では「就職や将来性」の選択率が低く、

Table 6 歴史地理学科における学科選択理由各項目への選択者数と選択率

|                     |      | 入学年度  |       |       | 合計    |
|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|
|                     |      | 2004  | 2005  | 2006  |       |
| 1. 自分の適性            | 選択者数 | 47    | 66    | 67    | 180   |
|                     | %    | 82.46 | 75.86 | 79.76 | 78.95 |
| 2. 就職や将来性           | 選択者数 | 15    | 23    | 20    | 58    |
|                     | %    | 26.32 | 26.44 | 23.81 | 25.44 |
| 3. 合格の可能性           | 選択者数 | 3     | 10    | 9     | 22    |
|                     | %    | 5.26  | 11.49 | 10.71 | 9.65  |
| 4. 親に奨められて          | 選択者数 | 2     | 3     | 2     | 7     |
|                     | %    | 3.51  | 3.45  | 2.38  | 3.07  |
| 5. 教師の意見            | 選択者数 | 1     | 6     | 6     | 13    |
|                     | %    | 1.75  | 6.90  | 7.14  | 5.70  |
| 6. 友人の影響            | 選択者数 | 1     | 1     | 0     | 2     |
|                     | %    | 1.75  | 1.15  | 0.00  | 0.88  |
| 7. 希望の学科に入<br>れなかった | 選択者数 | 1     | 3     | 9     | 13    |
|                     | %    | 1.75  | 3.45  | 10.71 | 5.70  |
| 8. その他              | 選択者数 | 1     | 2     | 0     | 3     |
|                     | %    | 1.75  | 2.30  | 0.00  | 1.32  |
| 調査参加者               |      | 57    | 87    | 84    | 228   |

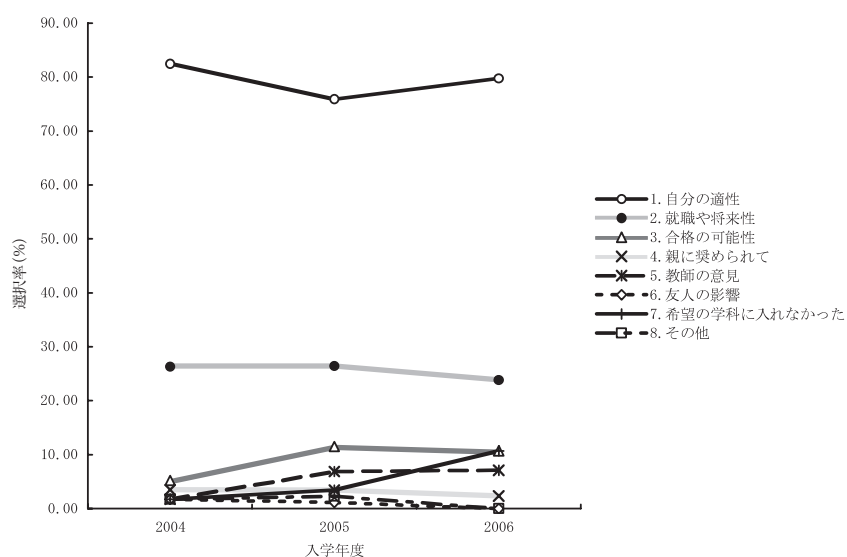


Figure 6 歴史地理学科の学科選択理由各項目への選択率

英語英米文化学科とコミュニケーション学科では、「自分の適性」と「就職や将来性」の選択率がほぼ同程度であった。「自分の適性」と「就職や将来性」の選択率が高いことは、状況や他者によらず主体的に学科選択を行う新入生が大半であることを反映していると考えられる。

また「合格の可能性」や「希望の学科に入れなかった」の項目は、受験の要因を表している。これらの項目を選択する者は全体として多くはないが、学科と入学年度によって多少の選択率の差がみられた。人文学部全体では、「合格の可能性」の選択率が近年低下傾向にあり、学部全体でみた場合には、合格の可能性のみを重視した消極的な学科選択を行う者が低下傾向にあるといえるかもしれない。

「親に奨められて」「教師の意見」「友人の影響」の3項目は、学科選択に及ぼす他者の影響力を反映する。いずれの学科についても、これらの項目の選択率は非常に低いといえる。ただしこの結果には、大学の学科選択という重要な意思決定に関して、他者の影響ではなく自分自身の考えで選択したのだという、原因帰属上のバイアスがかかっている可能性も考えられる。

以上のように、人文学部に入学してくる学生は主体的な学科選択を行っているようである。各学科にとって重要な点は、このような学科選択理由の傾向が、各学科が求める、あるいは想定する新入生像に合致しているかどうかという点であろう。英語英米文化学科において、全員長期海外研修プログラムが開始された2004年度以降に、「合格の可能性」の選択率が大幅に低下したことから分かるように、これらの項目には学科の取り組みが一定の範囲で反映すると考えられる。今後もこのアンケートは継続して実施される予定であり、学部や学科における新たな取り組みがどの項目に反映するのかを詳細に検討していくことも可能となると考えられる。また、本研究のような基礎的な資料を、学生にとって魅力のある学部・学科づくりのために生かす試みも求められるであろう。

## 文 献

- 願興寺礼子・桐山雅子・小塩真司（2006）. 大学新入生における精神的健康の年次変化（1）—精神衛生上の問題について— 日本教育心理学会総会発表論文集, 458.
- 桐山雅子・願興寺礼子・小塩真司（2006）. 大学新入生における精神的健康の年次変化（2）—精神衛生上の相談・治療の有無について— 日本教育心理学会総会発表論文集, 459.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2005）. 中部大学入学生における志望理由・目標・学科選択理由の変化 — 1988年度入学生から2004年度入学生までの比較 — 中部大学教育研究, 5, 15-24.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2006）. 大学新入生の心理的健康 — 1988年度から2004年度新入生のUPI得点の変化 — 日本発達心理学会第17回大会論文集, 727.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（印刷中）. 2006年度入学生における進学目標・学科選択理由・満足度

の学部間比較 中部大学教育研究, 6.

(2006 年 10 月 31 日 受理)